



『ほっかいどう学』の学びを考える シンポジウム2018 ～Let's learn Hokkaido～

平成28年3月、「世界の北海道」をキャッチフレーズとする第8期北海道総合開発計画が閣議決定されました。同計画は、本格的な人口減少時代にあっては、自ら考え地域づくりに取り組む地域の担い手を育成、確保することが重要であるとし、地域に関する理解と愛着を深めるために「ほっかいどう学」を促進することが盛り込まれました。

「ほっかいどう学」とは、子どもから大人まで、より多くの人々が地域づくりに関心を持つ契機を創出するため、自然や歴史、文化、環境等の北海道の魅力や個性について幅広く学ぶ取組のことでです。

平成30年3月14日、有識者の方々による基調講演や事例報告、パネルディスカッションを通じて、「ほっかいどう学」の更なる推進を図り、地域づくり人材の発掘・育成に資することを目的として、札幌市において、『ほっかいどう学』の学びを考えるシンポジウム2018～Let's learn Hokkaido～を開催しました（主催：国土交通省北海道開発局、一般財団法人北海道開発協会）。

本稿では、シンポジウムの概要について紹介します。

出演者

基調講演・パネルディスカッション パネリスト

○高野 宏康 氏

小樽商科大学グローバル戦略推進センター研究支援部門地域経済研究部学術研究員

事例報告・パネルディスカッション パネリスト

○朝倉 一民 氏

札幌市立屯田北小学校教務主任

パネルディスカッション パネリスト

○新保 元康 氏

札幌市立屯田小学校校長

パネルディスカッション パネリスト

○吉岡 宏高 氏

札幌国際大学観光学部教授、NPO法人炭^カ鉱^マの記憶推進事業団理事長

パネルディスカッション コーディネーター

○草苺 健

一般財団法人北海道開発協会 開発調査総合研究所 理事・所長

基調講演

「北前船と北海道～北海道のルーツと北前船の遺産～」



高野 宏康 氏

近年、小樽商科大学では地域志向型の大学を目指し、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」など、地域の歴史や文化を活かした地域振興、まちづくりの取組を進めています。私の出身地の石川県加賀市橋立町は、北前船の里として知られていますので、北海道でも北前船の歴史的価値を観光資源化できるよう取り組んでいます。

北前船は、江戸期から明治後期にかけて、蝦夷地（北海道）と上方（関西方面）を往来した廻船であり、各地の産物の流通のほか、人の移動、文化の伝播など、いろいろな面で大きな役割を果たしてきましたが、本州からの目線で語られることが多いので、北海道から見た北前船について再検討する必要があるということで研究を進めています。

その結果、北前船が、北海道のいろいろなルーツに深く関わっているということが分かってきました。道内の北前船の寄港地というと、日本海沿岸の港だけと思われがちですが、網走市や浦河町などにも北前船との縁が見られます。

明治になると、汽船や電信の発達により衰退していくというのが、本州から見た北前船なのですが、北海道から見ますと、人口急増などを背景として北前船が生活物資をもたらし、北前船主たちがビジネスチャンスを狙って積極的に北海道に進出してきたのは明治以降ということになりますので、随分イメージが違います。

北前交易で莫大な利益を上げた北前船主たちは、北

海道内で、倉庫業や銀行、北洋漁業、炭鉱など、さまざまな産業の勃興に資本を投下して、北海道のルーツに深く関わることとなります。小樽市では、お菓子屋さんや民俗芸能などにも北前船との縁を見ることができます。

北海道から見た北前船は大変興味深く、地域資源としての可能性も非常に高いと思っています。引き続き調査研究を進め、北前船を地域の観光資源や教育に結びつけていく取組を進めていきます。

事例報告

「札幌らしさを学ぶ小学校における雪学習の推進～雪のカリキュラム・マネジメント～」



朝倉 一民 氏

2000年に「総合的な学習」がスタートして、それに併せて、「北海道雪プロジェクト」が設立されました。その後、札幌市が、特色ある教育として「雪」・「環境」・「読書」の3本柱を掲げたことを受け、札幌市や札幌市教育委員会と連携し、札幌市に特化した「札幌雪学習」という取組を進めています。

これまで、札幌の子どもたちは、「雪」について体系的に学ぶことはありませんでしたが、「札幌雪学習」では「知雪」「親雪」「利雪」「克雪」「雪育」「雪害」という形で、「雪」を体系的に捉えて、授業を行ったり、教材を作ったりしています。

「雪学習」の授業づくりに当たっては、札幌市建設局雪対策室や土木センターと、私たち教員も何人か入って検討しました。「雪」や「土木」を専門にしている方々と一緒に検討することにより、より専門的な

「雪」の授業を作ることができるようになります。まさに、新しい「学習指導要領」に掲げられている「社会に開かれた教育課程」ということができると思います。

「雪学習」のように、教科書に載っていないものを子どもたちに教えようとする時には、オリジナルの資料、教材を作る必要があります。「ほっかいどう学」も然りですが、オリジナルの資料や教材などを用意しなければ、学校に普及させていくことは難しいですし、それらを用意することによって、後に続く先生たちも授業を展開しやすくなるのかなと思います。

また、実際に「雪」や「ほっかいどう学」に関する授業を展開し、広めていくためには、「教育課程」の中に位置付けることが必要です。その上で、各教科を横断的に見て、関連性を考えながら、授業の計画を立てていく「カリキュラム・マネジメント」が大切です。

パネルディスカッション

『多様な学びの場への『ほっかいどう学』の可能性について』

草苺 パネルディスカッションのテーマは、「『ほっかいどう学』の可能性について」ということです。言葉としてはシンプルですが、実は幅が広くて、奥が深いという感じもいたします。①「ほっかいどう学」の学習内容について、②「ほっかいどう学」の展開方策について、大きくこの二つのサブテーマに沿って議論してまいります。

サブテーマ1

『多様な学びの場に最適な『ほっかいどう学』の学習内容について』

朝倉 先ほどお話ししたように、雪一つとってもたくさんの方の見方があるので、まずは、教師が、ものごとを多面的・多角的に見て、ものごとにはいろいろな切り口があるということを理解することが必要です。その上で、実際に授業を行う際には、子どもたちに“学びたい”と思わせること、“どうして”“調べてみたい”と思わせるような発問、揺さぶりをしていくことが、

私たち教師の役目であり、非常に重要なことだと思います。



新保 元康 氏

新保 「雪」、「北前船」、「炭鉱」…、北海道についてまだまだ知らないことがたくさんあります。学校単位ではなく、北海道全体で「ほっかいどう学」に取り組む必要があります。今の子どもたちは、北海道のことを十分に学ばずに18歳で選挙権が与えられ、北海道民の代表を選ばなければなりません。これはどういうことなのでしょうか。私たち教育の責任は非常に重いと考えています。

高野 歴史や文化などの地域資源を観光資源に結びつけていこうと、いろいろと研究を進めていますが、研究というのは文字であり、言ってみれば次元の世界です。これを二次元、三次元と上げていって、五感で学ぶということが必要になってくると思います。

吉岡 今日の北海道の豊かさをもたらしたものは何かを学ぶことが必要です。その際、近世・中世だと「アイヌと和人の関係」や「北前船」、近代だと「石炭」については、必ず学ばなければならない必修科目だと思います。北海道は、計画的な開発が始まってからわずか150年でこれほどまでに発展してきました。その中核にあったのは、まさに石炭産業であり、「炭鉄港」の関係の中で学ぶことが必要です。



サブテーマ2

「多様な学びの場への『ほっかいどう学』の展開方策について」



吉岡 宏高 氏

吉岡 「学校教育」や「社会教育」の中で「ほっかいどう学」を展開していくことはもちろん重要で、特に「社会教育」における「大人教育」が必要だと思います。「学校教育」は学校が、「社会教育」は教育委員会が展開していますが、「大人教育」をより一層展開していくためには、多種多様なきっかけを作っていくことが必要になると思います。

また、会場に、北海道開発局のリーフレットが配付されています。泥炭開発の歴史については、北海道民の皆さんに是非学んでもらいたいですし、このようなものをテーマ別にまとめてもらえると、非常に良い素材集ができあがるのではないかと思います。

高野 大学受験の影響もあり、年表を暗記すること、固有名詞を暗記することが歴史教育だという風潮が強いのですが、ジオラマや食べ物などの素材を活用して、歴史を体感できるようにすることが大切です。北海道には、観光とまちづくりと歴史教育、これらをセットにして発信していける可能性があると考えています。

新保 今後、「ほっかいどう学」を広く展開していくために、必要なことが二点あると考えています。一点



目は小学生に「ほっかいどう学」を教えていくこと、二点目は、そのために厚みのある教材群を作っていくことです。来年から、小学校でも英語を学ぶようになります。グローバルに世界の人たちと渡り合うためには、ローカルを語るができなければなりません。ローカルを語るができる人材を育てられるのは、「ほっかいどう学」の必要性・重要性に気がついた私たちしかいないのです。

朝倉 4月から、新しい「学習指導要領」の移行期に入り、2年後には本格実施となります。「カリキュラム・マネジメント」という考え方の下、一つの教科を教えるというよりは、複数の教科を横断的に教えていくことが求められますし、その中で「ほっかいどう学」をどう位置付けていくのが大切です。また、「社会に開かれた教育課程」として、地域の人的・物的財産を活用していくことも求められます。これからは、社会と教育が融合して、本当の意味で子どもたちを育てていくことが可能になるのではないかと思います。

コーディネーター総括



草苺 健

草苺 地方創生や人口減少時代ということを考えれば、地域を知って、地域に愛着を持てるかどうかということは、その地域に人が住むかどうかという部分に直結しており、非常につながりが深い部分です。自治体の中には、地元学や地域学などが展開され、副読本も充実しているところもあります。子どもたちがふるさとを語る場所を見るのは感動的で、今日、そこに向けて非常に示唆に富むお話をいただきました。

皆さま、ありがとうございました。